

第三章

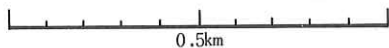
中世におけるわが町

金藏山金藏寺旧趾 $\frac{1}{25,000}$



79頁参照

- 1、白山権現
- 2、逆修塔
- 3 基經藏趾
- 3、観音堂趾、金堂趾
- 4、井戸、池趾、附近諸堂趾
- 5、山本、松本、杉本坊趾
- 6、大門趾
- 7、坐禅石
- 8、堀割



第一節 中世の仏教とわが町

一、中世における但馬の仏教

班田制は人民の人格を認め、公民として土地を給し、その反面国家に一定の権利義務を課することとした制度であつた。この制度により氏族の束縛から解放された公民は、異氏族間の通婚を容易にし、労働の移動性を大きくした。したがつて経済地域の拡大となり、物資の交換が行われ、分業が発達し、人口が増加していった。(本庄栄治郎・黒正巖「日本経済史」一五五頁)

しかしその貢租は、当時の生産力の段階では重きに失し、賦役令、雑徭名目で農民を使役して開発が行われた。とくに下級官吏である郡司は地方豪族となつて、土地と農民を私的に収奪し、公地公民制と租庸調体系を徐々に崩壊させていった。とくに田租として徴収した稲や粃を、国・郡の正倉から出して貧民救済の名で貸付ける公出挙(くすいこ)制は、高利貸的な強制的な性格をもち、一層生産階級を収奪する結果となつた。加えて墾田永世私有法も、親王五百町歩、中央貴族三〜四百町歩、豪族二百町歩以下という限度を設けたが、律令制の解体と荘園制の生成の原因となつた。もちろん政府は七五六年その土地に居住する百姓だけに、一町から二町歩までの規模だけの開墾を許し、他を禁止する法令を發布した。しかしこの法令も社寺・貴族・豪族の土地私有化慾を防止することはできなかつた。これらの制約を超越して広大な林野と未墾地を囲い

込み、地元農民の労働力を調達編成して開墾を行い、広大な土地所有者となった。また七三七年の郷里制の廃止後、七四四年の「公廩稲（くげとう）制」の新設によって、国司層は地方官というより徴税請負人化し、毎年定額の租税を中央へ送った後は、その特権を利用して莫大な収入をあげた。九世紀末頃までこれを「受領（ずりょう）」と呼び、国衙領を事実上私的収入源化し、荘園領主化への途を辿った。

二、仏教と但馬及びわが町の寺

仏教の伝来は但馬の国にとつても、その後の歴史的影響の最も大きい出来事の一つであった。日本の古い寺はもちろん、但東町の古今の寺院史はこれから初まるからである。人間は社会的動物であつて、早くから国際的交流を行い、物を交換し、技術や精神文化をも交流してきた。東洋の仏教もそれで、宗教の教義と教えを学び、安心立命の新しい宗教を生活にとり入れてきた。

しかし大陸の宗教である仏教が日本に伝来してきたのは、大陸交通の結果であり、その基礎は舟運の発達であつたといえる。海を横断して朝鮮や大陸と交通するには大形の舟が必要であつた。その大型船の造船技術は、朝鮮より伝えられたという。応神帝の頃新羅王が船大工を献じてより、「緒名船」のような大型船が作られるようになった。朝鮮に大軍を出兵するようになったり、支那に使を派遣するようになったのは、このような韓式大型船を作り得たからである。遣唐使等の長途の舟運には、帆船が用いられた。そして順風の時の風力利用と同時に、「逆風の時「間切る」事で推進に活用するようになったのは、中世になってからの事であるといわれている。（本庄「日本経済史」）

但馬史と関係の深い新羅の王子天日槍(あめのひばこ)は、切風・切浪・風振・波振の神宝をもたらしたという。神功皇后の持つていたといわれる潮湫・潮満の宝珠等とともに、風向・潮流を測定する道具は航海に不可欠のもので、それを保持することによって、航海の安全が計られ、危険を予知しうるものであったとすれば、それはまさに神器であつたにちがいない。航海のような危険を伴う仕事そのものが、航海術と同時に、海上の安全を祈る宗教的な支えが必要になつていた。

日本の古代宗教は神道であつて、それは氏族社会における祖先崇拜に始まるといわれている。氏族社会においては、共同祖神が絶対的なものであり、新しい村落形成には、それを奉祠し、国内移住の時にもその分社を奉持して移住した。しかしこれらの神社は、地域と氏族に限定があり、系図が明確であつた時代は、絶対的尊崇の紐帯であつたが、社会交通の発展、氏族交流の複雑化と共に、血縁・縁故関係も複雑化し、氏族を統制する多神教の神道では、実際上の統制も、精神的宗教的な統一も困難となり系統争い等、各種の矛盾も起つてきた。これに対し大陸からの仏教の伝来は、仏陀が万人の上を超えし、共通のものとして存し貴きも卑しきも、富めるも貧しきも、みなこの絶対的支配者の前には、一切衆生が平等であると教えた。また仏教の信者は、死後は仏陀のもとに行くことができ、自らも仏となると説いたため、各民族が不可侵の氏神を擁して斗つたり、排斥し合つたりした多神教信仰に対し、それらの支配と死から解放される新しい衆生の信仰となつた。またこれらの信仰に基づく「王道思想」は、支那大陸の政治思想でもあり、新政治組織の輸入と結びついて統一国家の精神的統一のためにも国教となる可能性をも内包していた。

そのようにして生れたいわゆる中世の「天平の文化」は、唐文化と仏教との深い影響の下に、平城京を中

心として生み出された華やかな貴族文化であった。記紀・風土記等の編纂、日本固有の和歌文学が発達し、万葉集が作られた。またこの頃南都六宗の仏教が畿内に確立し、寺門の僧侶も社会の上層階級の一つとなり、競って布教のための教理と地理の研究に従ってきた。当時の国家も王道思想に基く憲法、律令を制定すると共に、「鎮護国家」の法として仏教の保護奨励に努め、護国經典の普及に力を入れた。天平一三年(七四一年)諸国に国分二寺建立の詔が発せられた。また東大寺の大仏の鑄造なども行われた。但馬に關係の深い名僧行基もこの時代の人であった。

靈龜元年里を郷と改称することとなり、神龜元年(七六二)下郷を資母郷と改むという史書もあるが、天平三年には既に行基は伊丹村の造池工事を指導しており、一八年には山陰に至り「浜坂」の地名を与えている。また「養父郡誌」によると、天平勝宝二年(七五〇)新宮山満福寺を開基している。これは聖武帝から勅命を受けて邦国を歴遍し、国毎に一寺を建てて国分寺としたが、但馬では唐僧鑑真が来朝した翌年の、天平勝宝七年(七五五)国分寺を建てている。新宮山満福寺は、この頃建立されたものといわれている。

すなわち弘化の頃当寺五七世の僧弘鳳が寺歴として記録している「新宮山満福寺之記」は、この当時の開山の模様を次のように記している。

「大士(僧行基のこと)この国(但馬養父郡)に至るや、己に国分寺を建て、また別に一勝区を選んで伽藍を作り、以て皇運の無窮を祝し、しかも一〇万の民庶を化せんとす。諸山を訪い求むるに、一つも意に当るものなし。たまたまこの地に至るや、遙かに山上を望むに紫雲ただよい光輝常ならず。即ち山に登り光輝の発する処を探りて一株の靈樹を得たり。よつて帝に奏してこの寺を創立す。凡そ院をなすこと一つ本淨院

という。坊をなすこと一九、大門坊・竹中坊・遠善坊・長光坊・池の坊・澄の坊の他、北・上・角・大中・辻・下・東・倉・龍尾・大谷・故・小の各坊これなり」。

(注・一九坊とあるも以上は一八である)

また大士(行基)は光輝が発していたというかの靈樹を伐つて、自ら千手千眼大悲の尊像を刻んだという。「長さ拾有二尺(一二尺 \parallel 三・六m)これを本堂に安置す。(現存の左右の分身三三體は延宝年中(一六三三—一六四〇)住寺の僧決恵が衆に募つて造つたものである)また慮舎那及び四天王の像を作り、三層の塔を建て以て、これをも安置す。しかして山門には金剛力士(この力士の一足は今も残っている)中門には門守神あり。また大日堂・不動堂・鐘樓あり(鐘口二尺三寸、口より龍頭まで三尺八寸、その形状古雅なるも銘文なし)のに規制大いに備わり、遂に一大道場となり、名づけて新宮山、満福寺という」(「輕部郷一二所村史」一九頁)。

これがこの当時の但馬における古寺開山の寺歴であるが、更に次のような付記が行われている。

「大士(行基)開山の日たまたま一老翁あり。来り、行基を助けて労をとること甚だ至れり。自ら曰く『われはこれ新宮権現なり。この拳を喜ぶ故に来り助力するのである。今からのち永くこの山に住して、もつてこの伽藍を守るべし』と山中守護の神となす。この山を新宮と称す所以なり。また別に八幡大神の祠を営み、もつて郷里の守護神となす」(一九頁)

前者はいかにも寺歴らしい物語りであるが、後者の守護神としたことは真実であろう。

このように僧行基の但馬満福寺の寺歴をみてきたのは、その後建てられたという但東町における金藏山金藏寺その他、中世の廃絶寺の歴史を考證し、その寺歴の口碑・由緒と比較するためである。

その後奈良から鎌倉時代にかけて仏教は盛んとなり、僻地の山頂を開拓して寺領を拓き、寺院を建立するいわゆる「山岳仏教」の時代となる。それが更に但馬及び但東町における、寺院の建立と関連してくると思われるのである。

奈良時代は、仏教伝来以来既に二世紀を経た時代である。平安京を中心に、仏教文化が隆盛となるが、この時代も仏教が鎮護国家思想に基き、政府の守護のもとに行われてきた。金光明経、仁王経など、護国の経典が盛んに転読され、書写され、仏法の呪力によって五穀の豊饒、皇位の安泰、国家の隆盛が期待された。全国に置かれた国分寺、国分尼寺もそれであり、東大寺はその中心であった。また奈良七大寺（東大・興福・元興・大安・薬師・西大・法隆の諸寺）を中心に、三論・法相・華嚴など、唐仏教教学諸派の学門が研究された。中でも華嚴の研究は、やがて奈良仏教の異端者である空海・最澄の思想を育んだ。しかしそれらによる山岳仏教の開発は、寺領荘園の増加、僧侶勢力の政界進出となり、それは僧道鏡において極限に達した。その専横は、平安遷都の原因となったことでも知られる。

平安奠都と時を同じくして最澄・空海が現われてくる。これらは大陸仏教の丸写しでなく、日本的な、しかも日本の地についた仏教として樹立されてきた。最澄は、延暦七年（七六八）比叡山に延暦寺を建てるが、八〇七年入唐し、天台法華宗を学んで帰り、延暦寺を中心に、天台宗をひろめた。また空海も同じ年入唐し、真言密教の教を学び、のち高野山に金剛峯寺を開いた。最澄が南都の仏教界から独立し、新に戒壇を設けようとして相争い、一生を斗争に終つたのに反し、空海はたくみに南都仏教界と妥協し教泉を広めた。しかし在世中全国を歩み各地に寺を拓いた点は行基に似ている。旧「資母村誌」は但東町における金藏山金藏寺の

如きもこれであるという。金蔵山の金蔵寺は今は廃絶寺となつて山上に古跡を残すのみとなつてゐるが、中世の但東町の様子を知りうる事例であるので、既存の口碑由来、遺跡、古文書等により、それを尊重し出来る限り当時の但東町の歴史に接近してみれば次のようになるであらう。

この金蔵寺は旧「資母村誌」が、廃絶寺院として諸資料を記録し、古墳を調査している。しかしこの幻の寺が中世に存在していたことは、寂室和尚が北朝時代にここに寓居したという記録に徴しても明らかであらう。

三、山岳仏教と金蔵山金蔵寺

このようにみてくると、史実の少ない中世の但東町の歴史に、今はない幻の寺院金蔵山金蔵寺の遺跡が浮び上がってくる。旧「資母村誌」はこれを廢絶寺として、若干の口碑や由来記や古文書、遺跡を發掘している。まずこの寺を訪れた僧の記録からみよう。

すなわち校補「但馬考」一四〇頁に、

「南朝後村上帝の興國元年（二三）北朝歴応三年の頃、寂室和尚入但、出石郡金蔵寺に寓すること二年」とあり、当時の文章が残されている。「資母村誌」の伝える金蔵山の金蔵寺（現存の金蔵寺と異なる）の由緒として記するところによれば、

「弘仁年間（八二）空海上人諸国遍歴の際金蔵山に瑞雲あいたるを望み、分け入りて登り給うに南に当り一巨石あり（現存）、坐して禪定を修し給う。遂に止りて一寺を建立し、瑞雲山金蔵寺と名付け給えり。七堂伽藍の跡現存す。古は真言宗として境内八丁四方、寺領三千石を有せしも、元龜年間（一五〇）織田氏のため討落されたり」と。

その空海が但東町に來り、金蔵山上に瑞雲を見たという由緒の記事は、前述「養父郡誌」や、「十二所村史」が伝える新宮山満福寺の寺歴の記事と余りにもよく似ている。およそ開山寺歴の由緒とはこのようなものと思える。問題はこの当時空海が但馬に來たかどうかである。平安時代の初期を占める弘仁期（八二）の文化は、仏教美術として密教美術が勃興し、不動明王像等の傑作が現われると同時に、新しい天台宗、真

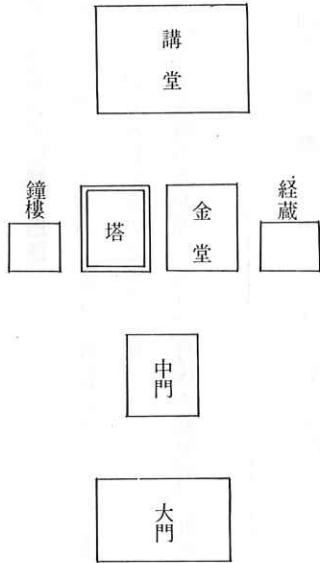
言宗が勢を得、また仏教と固有の民族宗教との習合が進められた時代であった。そして天台と真言とは、相争つて僻地の開発と布教に力を入れた時代であった。金蔵寺の支院で現在加悦西光寺が、明治一七年（一八八四）京都府庁へ進達せる寺院明細書によれば、

「陽成院の御宇元慶四年（八六〇）但馬国出石郡金蔵山上に創立あり、御朱印高二千石の寺領」

とあり、これによれば空海の没年が八五五年であるので、没後二五年の事に属する。もしこれらの記事にして誤なしとすれば、空海は四〇才位の頃但東町に來り、山上に寺院建立の計画を樹て、没後二五年の八八〇年寺院を創出したことになる。このような山上に大きな寺院を建てるためには、前の新宮山満福寺の場合もそうであるが、金蔵寺由緒の伝える「七堂伽藍の跡現存す」（「資母村誌」一六八頁）はやや表現が大に失する嫌いが無いでもない。既に「資母村誌」の編者が記述しているように、真言宗の七堂伽藍すなわち「真言七堂」とは、金堂・講堂・塔・経藏・鐘樓・中門・大門等の七大建造物を云い、「境内八丁四方」とあるも山上のことでもあり、到底そのような建造物を平面に配列する余地はなかつたと思われる。もつとも群馬県の榛名神社等のように、谷間の狭い箇所に大きな建造物が建築、配置されている例もあるが、その配列の距離と山上の面積とを比較しても、七堂伽藍は無理のように思える。現存している旧跡にみるような「大規模の寺院」という意味であろう。ただ寺領二千石又は三千石といい、僧兵多数を擁していたとすれば、相当の僧坊を必要としたことは想像されねばならない。

以下現存の記録と遺跡により、この幻の寺院に関する史実を再現に努めてみよう。

【注】 伽藍とは梵語僧伽藍摩（Sanghaharama）の略称で、衆園と訳し、寺院をいう。七堂とは何により



- 一、金堂——仏像を安置奉祀する。俗に本堂ともいう。詳しくは金色堂という。金色燦爛としてい
 - 二、講堂——仏典を講義するところ。
 - 三、塔——仏舍利を奉安する。
 - 四、経蔵——一切の経蔵。
 - 五、鐘樓
 - 六、中門
 - 七、大門——南大門ともいう。
- その配置は法隆寺形式によれば左の通り。

定められたかは明らかでないが異説もある。真言七堂と禅宗七堂とがある。真言七堂とは

1、金蔵山金蔵寺の由緒と遺跡

山本助太夫文書の「瑞雲山金蔵寺」現存の中山にある金蔵寺と区別する意味で、金蔵山頂にあつた古金蔵寺の遺跡についてみれば次のようである。

金蔵寺山は但東町の西北部にあり、丹後の加悦町、野田川町に接する県境（但馬国と丹後国の国境）にあ

口絵写真 懸 仏（かけぼとけ） 説明

旧金蔵寺の鎮守白山妙理権現の本地仏十一面観世音像を鍍金した銅の円板上に槌出しにして作り、左右に蓮華を取りつけている。円板が薄いので裏板がつけてあり、その左右上方に紐を通す釣手耳があり、製作年代は室町時代のもの。もと加悦町の西光寺の所蔵であったが、明治維新以後所有者が転々と変り、現在は臨濟宗妙心寺派加悦吉祥寺の所有となっている。金蔵山の数少ない遺品の貴重な一つである。

寂室円応禅師の座禅石



（金蔵山中復）

り、但東町側より見れば古樹繁茂せる時は、山頂はどこから見ても円形に見える。近時古樹伐採され山容は、若干狭まっているが、ほぼ円形の山頂をなしている。但東町内からは虫生又は中山瀧谷を経て山頂に達する途あり、奥藤、奥赤より山頂に達する途もある。山頂の一番高い所には白山権元を祭る小祠あり、その下に明治初期に改築された観音堂あり、また山頂の尾根に沿ってゆくと金蔵山金蔵寺由緒に、空海上人が坐して禅定を修されたという巨岩がある。それ程高い山ではないが、遙か天の橋立を遠望することができる。風光明媚で、昔山を歩いて往来した交通の要所にある。山頂に達するに最も近い山道は、虫生より棚原を経て上る途であり、その裏側にある奥藤より山頂に達する途もある。しかし最も平坦であるのは中山より瀧谷を経て登る途で、恐らく往時の正道はこの途でなかったかと思われる。現在云い伝えられている地名に「仁王曲り」「地藏坂」「山本坊跡」等がある。往時僧兵等の屯していた坊跡の名が地名となったものと思われる。しかし最も近い途は虫生より上る途で、往時の日常の通路はこの途と思われ、寂室和尚が五〇余霜月遊んだという田原（棚原）部落あり、「庵屋敷」があつて東光菴跡がある。

山頂はかなり平坦部があり、今は四季涌水とはいえぬが古井池がある。したがって山頂ではあるが水の調達には余り不自由でない。このような地の利を踏査して寺院僧坊の経営を考えたのは、やはりかなりの名僧か賢僧・偉人であろう事は想像に難くない。

平坦な山中が寺院跡で、古い石垣のあとが見られ、それらの分布よりして、相当規模の寺院があつたものと思われる。そこに現に散在し、拾蒐されたもので旧「資母村誌」が調査した遺物は次のようなものである。

- 1、石柱 高さ三尺余（一m）三寸角

「正和四年（二三五）乙卯十月十八日、願主沙弥蓮意」とあり、願主の名は明らかであるが、その形は墓標でもなく頂部の面が滑かである。燈籠の台柱でないかとみられている。（現在は金藏寺にあり）

2、七重層塔一基（屋根二層及び九輪を欠く、外残缺二基）、空輪はないがかなり大きい。村誌は「極めて雄なるもの也」としている。

3、板牌無数、処々に発見される。

4、逆修塔三基、自然石でその面に弥陀三尊の種字と次の戒名が誌まれる。

大法師祐、權少都定重、同隆

一基

權律師舌

（梵字）權少僧都賢恵、盛順、菩提永間通明

一基

常金、妙秀、妙心、道心、道善、佑心

（梵字）權大僧都（以下不明）

一基

永禄十一戊辰年四月五日施主各人存逆修

この三基が残っている。永禄一年（二五六）は、永禄元年加悦西光寺に真言宗金藏寺が引越し、良真上人が再建された年より数えて二四年前で、この年金藏寺が兵火にあつて焼失という事は、各記録共みな一致し、元亀説もある。なお「逆修」は預修ともいい、死後に修せらるべき七七日の齋を、預め生前において修し、また生前に戒名をつけるものを云う。「随願往生十方浄土経」に「逆修の功德の無量」を説いている。また「預修盛衰記」三に「入道祖国は福原にて逆修行われける」等とあり。この年は金藏寺焼打ちの年であるの

で、山本氏由来書にもあるように「此證金藏山大石塚」に「逆修」として刻み付けたのではなからうか。なお永浜宇平氏（京都府中郡の人・故人）の調査によれば、丹後地方の逆修塔は「永祿」に最も多いといわれている。

5、木仏像一体

いわゆる十一面観世音菩薩これである。丈一尺八寸、平安末期仏教芸術の盛んなりし頃の作品と見られ、弘仁期の密教美術に見られる仏像に比して、この頃は比較的明るい日本人らしい容姿のものが多くなっているのが特徴といわれている。

6、仏具 碗十四個

当時の茶湯器とみられており、銅製で鍍金の跡が残っている。（金藏寺蔵）

由来大石塚に刻み付けとあり、その遺跡・遺物があることからして何かが現存せしことは明らかである。しかしこれらの寺も、城と同じく存在していたとすれば多数の地元住民とくに農民の労力や、当時の著名の寺院大工、宮師等が動員され、かなりの日時をかけて完成したものと思われる。これらの記事はないが、それを想像するに難くないものと思われる。町史や郷土史の任務の一つは、これらについての断片的な古文書や口碑、由来と、現存する遺跡や遺物を考證し、一つのまとまった史実に再現してみることで、その誤りや史料・推理の不足は、後日に訂正さるべきであるといえる。

2、寂室和尚と金藏寺

既に「但馬考」も記しているように、中世の文学、宗教とその頃の但東町の有様を知るものとして寂室和

尚の、但東町金藏寺假寓の記事は注目に値する。

寂室円応禅師は諱を元光という。作州（岡山県）の人で正応三年（二六〇）五月一五日に生る。一五才の時江州（滋賀県）田上に至り、その僧の紹介により鎌倉に至り約翁に師事し、仏門に入る。当時中国支那の名



石上に詩想する寂室禅師（想像図）

僧天目山中峯和尚の名を聞き、後醍醐帝の元応二年（三三〇）渡支、中峯の他古林・情拙・靈石等の大和尚の教をうけ、嘉暦元年（三三三）帰朝、日本国各地を歴訪し、山陽・山陰・近畿の諸国の寺に半年あるいは一年止って、専ら聖胎長養すと。（「資母村誌」二二八頁）元弘の乱のあった元弘元年（三三三）年には、但東町では太田判官が亀ヶ城を築いた年である。その「但馬太田文」にも金藏寺山領の記事がないから、その頃は開墾私領の山頂の寺領であったかも知れない。太田氏の但馬太田文は弘安八年（二六五）のことであるから、その頃は寺領として公認されていなかったかも知れない。しかし亀ヶ城構築後九年の興国元年（二三四）寂室和尚が金藏寺に來り、一年寓居し思索と作詩にふけて

いることから見ても、金藏寺は既にこのような名僧の寄寓しうる寺として存在していたことは明らかである。

その寄寓中寂室和尚は次の文章を残している。

寂室録金藏山壁に二首書いて曰く

「借_二此閑房_一恰一年、嶺雲溪月伴_二古禪_一、明朝欲下_二巖前路_一、又向_二何山石上_一眠。

風攪_二飛泉_一送_二冷声_一、前峰日上竹窓明、老来殊覺山中好、死在_二巖根_一骨亦清。」

又備前要侍者予に偕て但之金藏山に寓すという詩もある。（「校補但馬考」四二六頁）

生れたのが正応三年であるから、興国元年は彼が五一才の時のことであるといえる。

また寂室録によれば寂室和尚は金藏寺の西麓の溪間にある虫生の田原に遊んだとして次の詩がある。

「九月一三日遊_二田原村_一、投宿_二茆舍_一、同来諸弟皆曲_レ肱就_レ寝、独開_レ窓觀_レ月、聊写_二老懷_一耳。

戊子季秋將_レ半日。田原村裏宿_二烟蘿_一。看来五〇余霜月。幽興不_レ如今夜多。」（「寂室録」）

その他金藏寺山上の作として次の文章がある。

「備前要侍者偕予寓但之金藏山冬迨_二于春_一忽一日辞往京師俚語以成贖別云子伴病夫金峯索莫对雪擁爐口边生

醜_二三玄_一要瀨商量 四句百非渾剗却 今朝又遂春雲掃帝郷 何日相逢共看山月白」

春夏秋変化多く、冬は雪が埋って爐辺に雪景色を楽しんだ中世の但東町の風光が、この寂室和尚の詩文に

よって知ることができる。

寂室録は更にその上卷六丁で

「戊子姑洗之未出遊而帰云々」

とあり南北朝の正平三年(貞和四年二四〇)から翌年の秋まで金藏山に在ったことが知られる。禪師五九才の時のことである。

興国三年金藏寺に来てからこの年まで、帝郷に帰ったことはあったが、かなり長い年月を金藏寺山と田原村に遊び、作詩と寺院建立の想を練った寂室和尚は、その後正平一五年(延文五年)に佐々木氏頼と奥の島と雷溪の地に永源寺を創建し、正平二二年(三六七)七八才で永眠した。

興国四年(康永二年二四三)には前述養父郡の満福寺の碑が立てられた記録があり、一三五二年には「但馬風土記」がなり、宝徳四年(三五三)には「太田文」が写されている。しかし、満福寺のように、のちの住職が寺歴を残していないこともあって、最盛期の金藏寺山金藏寺に関する記録は今のところ何も残されていない。

しかし但馬太田文には出ていないが、その後の隆盛は山岳仏教としての山地の開拓と他領の押領により山武士・僧兵を擁して寺領を二千石、ないし三千石を維持していた事は前述山本文書でも知られる。山本坊跡あり、杉本坊、松本坊があったといわれ、時に他の寺領等の押領を試みた事はその頃の山寺として容易に想像される。最も近い丹後野田川町岩屋の雲巖寺も相当な寺領をもっていたが、大永八年(二五八)の頃、攻撃された記録を残している。例えば「縁城寺年代記」は、

「乙酉大永五(二五五)与謝郡岩屋雲巖寺、兵火に羅る夏七月」

とあるは恐らく金藏寺山僧兵によるものであろうし、「宮津日記・上の巻」に曰く、

「与謝郡炎上は、大永七々八年の頃(元禄一三年より一七二年前)の由にて、但馬国藤ヶ森の近辺寺領にて有之候を、但馬城主押領改すべしとして二年の間度々攻来る」云々(「資母村誌」)

岩屋村の伝える口碑では城主ではなく、これは金蔵山金蔵寺の僧兵であつて、絶えず攻めたり攻められたりしていたと伝えている。（「岩屋村誌」）

この時代の文書や記録はどこかに残っているはずである。かつて「三河内村誌」の編者が、金蔵寺山に関する古文書を持っているともらした事があつた。恐らくこの頃の文書でないかと思われる。本町史編纂のためその遺族を訪ねてみたが、その編者は他界され、その文書の所在も知れなかつた。

3、金蔵寺領の滅亡とその遺蹟

現在中山にある金蔵寺は、臨濟宗であり、古い金蔵寺山金蔵寺とは別のものと見られ、一応廃絶寺院となつている。しかし口碑や由緒記によるまでもなく、元慶年間に開山されたといひ、寂室禪師の寄寓及びそれらの文章といひ、山頂に残る壮大な遺蹟・遺物といひ、古くから残っている地名といひ、中世に古い金蔵山金蔵寺が存在したことは疑い得ない。もし西光寺明細書の元慶四年を金蔵寺の創立年とし、永禄一一年に兵火により滅亡したとすれば、七四八年間また元亀年間織田氏によつて討落されたとすれば、七五二年間、金蔵寺は真言の法燈を守つていたことになる。その間逆修塔にも見られるように、法燈を守つた名僧がこの地に骨を埋めているのである。これがどうして亡びたであろうか。その間の由緒や文書についてみよう。

「資母村誌」の伝える由緒記は

「元亀年間（二五〇）〜（七三）織田氏のために討落され爾來衰微せり」と。

また西光寺の明細書は、

「永禄一一辰年兵火に罹り焼失」云々。

また山本助太夫「山本氏由来書」は、

「永禄十一年辰四月四日大勢攻来り、思不寄事なれば寺々騒動し、弱き者は逃げ隠れ、早落ちゆくもあり、若き僧俗相戦しが、四日五日と兩日焼討せられ、僧俗討死す。この證金藏山大石塚に刻み付有り」

と記されている。大石塚とは逆修塔なりと資母村誌はのべている。山上の寺院が何故繁栄したかは住民や地方豪族の信仰はもとより、開拓山地が寺領として私有が許され、あるいは黙認された事によるものといえる。その社寺領も亦、時の支配者・豪族に貢物を送り、その祖先一族を祀り、回向して支配者から更に寺領や山を寄進されるよう、政治的支配との癒着に努めた。しかし山上の生産物のない処で僧侶を養い、寺院を維持するためには、他領を押し、山林や村落を住民共寺領に治める必要があつた。寺院の特権を背景とした僧兵などはそのため必要で、天台宗などはそれが繁栄の原因となつていた。

このようにして中世は戦乱相次ぎ、戦死者を葬るための新しい宗派も起り、寺院は充実され、寺院領の勢力は、時として地頭や御家人の勢力を上廻るものがあつた。

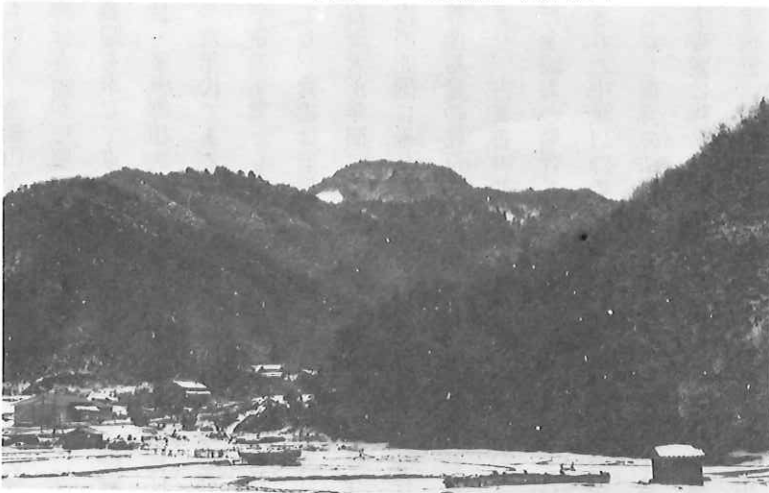
この間領国大名の統一が行われ、織豊時代に入って天下の統一のためには、諸国大名小名の他このような独立国家の形をもっている寺領を統一し、それを拒むものは平定する必要があつた。

「但馬史」は天正年間からの織田・豊臣の数次に亘る但馬征伐の様子を詳細に記述しているが、これら織豊勢力による但馬の統一は、当然僧兵のこもる金藏山金藏寺の平定に及んだものと思われる。山本文書の示す通り、永禄一年の攻撃は急であつたため、寺院と古文書は焼失し、有力な僧も討死したものと思われる。口碑記説によれば攻め亡した武將は織田信長の臣森蘭丸ともいわれているが、年代は元龜年間とも永禄年間

ともいう。金藏山金藏寺に残る逆修等には永禄一一年(二五〇)と記録されているが、数次の但馬征伐により、僧等は寺領が征服の運命にある事を予知し、逆修塔を残したのかも知れない。ともあれ、この年は信長が足利義昭を奉じて京都に入り、諸国の関所を撤廃した年であり、元龜年間といえはその二年後の一五七〇年で、信長・家康等相次いで入京し、皇居の工事をを行い、長島一向一揆等、仏教徒の反乱に対し、徹底的な征伐を行った年代である。この意味では岩屋の雲巖寺や、他の寺領によって攻略されたのでなく、織田・豊臣の全国平定の事業として、その軍によって滅亡されたと見るべきである。もし織田氏がそれを滅ぼさなかったとしても、秀吉は但馬征伐で彼に反抗した人達は、徹底的にやつつけた(「神美村誌」といわれているから、秀吉が天正年間に入って攻略したのかも知れない。前記「十二所村史」の新宮山満福寺も、「降つて天正中秀吉の此国に來り、亦兵火の為に焼かる。唯存するところのものは本堂一字及び本淨院一院のみ、其余大悲の尊像易産の秘符亦幸に甚災を免る」(二〇頁)と寺歴は書き残しており、村史も「秀吉の但馬征めの戦火により、古文書の如きものは現存していない」と記している。金藏寺の最後もほぼ同じであったと思える。ただ金藏寺の場合は八丁四方に亘る遺跡と、古碑だけが残っている。いずれにしてもそれは、山陰の山奥に残された中世以降の寺領莊園の最後であったとみるべきであろう。

しかし真言の法燈は消えなかった。祖先をこの寺により葬つた地元の壇家は、支院西光寺に集り、一時赤花字寺岡に移った。今でもここに二〇数戸の壇家がある。支院西光寺は金藏山金藏寺焼失後、赤花から加悦町字後野に移り、焼失後二四年のちの文禄三年(二五三)良真上人が西光寺を興し今日に至っている。加悦後野の西光寺は、入口にその標札を掲げているし、古い山門は、その後改築はあつたとしても古いその当時の面

虫生からみた金蔵山（453.6m）



下右の集落は田原



金蔵山上に正和四年（三五）建立の笠塔婆（鎌倉時代）

（金蔵寺境内）

影を残している。惜しい事に鐘は戦時中供出してしまい、鐘銘から昔を忍ぶことは許されなくなっている。

金藏山上の金藏寺はその後徳川時代となり、「荒艸漫々野鹿群嶺猿抱子者年尚矣三四歳」という状態にあったが、明暦四年（一六五八）肥後国泰勝寺興山大禪師がこの山に来て古刹の中絶せるとなげき再興したが、鎌倉仏教として開祖栄西が建久六年（一二九五）に開宗した臨済宗の寺として初めて禅風を吹き込んだ。また嗣席炎雪禪師、次に守玲祖傳、次に義範がこれを継ぎ、膏油の田二〇石余を買い付け、また金藏山の山峯が峻岨で交通に利便でないので、明和元年三月二一日に寺を中山の山添の地に移した。

（金藏寺由緒「資母村誌」一一二～一三頁）

宗派は変わったがその法燈は今の金藏寺に受継がれているといつてよい。

4、奥藤山内の笹堂と観音祭

このように中世における金藏山金藏寺の記録は、その後全く消滅してしまった。庶民が文字による記録を残さなかつた中世の特質ともいえるが、その中であつて民間信仰による祭祀行事は、一つは父祖伝来の信仰に基く口述口碑により、二つには庶民の日常生活と結びついた年間生活行事、とくに民間信仰を基礎とした慰楽、レクリエーション行事として伝承されている。奥藤の「佐古文書」によれば、現に奥藤山内にある笹堂は「中世金藏山に七堂伽藍のあつた当時の遺物で、伽藍廢滅後山から下され、須賀神社境内に移されていたものを明治初年（？）現地に再建したものと伝えられている」とされている。金藏寺の滅亡は一五六九年の永禄一二年とされている。明治元年は一八六八年である。その間正に三〇〇年間、この木造建築物がどのよう保存され、修繕されてきたかは知る由もないが、建築物としては残存しうる事は他に例は多い。しかし

佐古文書は「その構造は堅牢であつて、明治四〇年（一八九七）の大暴風雨の際、突風のため全部吹飛ばされ、道路下に転落し『真逆様』（まつきかさま）に倒れたが、構造に破損なく、突全にもとに復したという。その後昭和四五年山内に道路改修があり道路敷地となつたため堂を撤去し、元公民館跡の現在地に移建した」と記録されている。

この笹堂では毎年旧盆八月一七日に「観音祭りが行われ、山内地区の老人が集り、念仏を奉唱した。またこの日は部落親戚を招いて夕食を樂しむこととなつていたが、いつの日か、老人もいなくなり、この観音祭りも廃止となつた」といわれている。しかしこの笹堂だけは今も残つて中世金藏山の唯一つの遺跡となり、四〇〇年の歴史の生ける証物となつてゐることが、佐古文書で伝えられてゐるのである。中世の但東町史を物語る数少い建物といえよう。

四、遍歴開山と唐川禪定庵

中世から近世初期の寺院は、金藏寺に見られるように、賢僧が遍歴中にその立地条件を卓観して開山したものが多し。このことは旧合橋村唐川の寺山の廢寺院禪定庵の事例においてもみられる。同村細川政次氏の「唐川の沿革」によれば、鼎山大禪師が金藏寺を臨濟宗として中興され、延宝年間には藏雲寺が古藏雲寺より現在の地に再建された半世紀後、宝永・正徳の頃丹後加悦郡般若寺（曹洞宗永平寺派）の住職を隠退した隠山善月師が、諸国遍歴の途但馬唐川の寺山の景勝に目をとめ、寺院建立の計画を樹て、山林五ha 田地一・一ha 畑凡そ〇・三haを求め、庭園、池を掘り、堂宇を建て、勢至觀音像（立体の地藏尊像）を祀つたといわれ

第一節 中世の仏教とわが町



唐川禪定庵の石仏（上・下）

ている。この寺の開山一世の僧隱山普月和尚は、享保二年（一七二一）三月九日成仏している。明治六年の寺院調査では、本堂四五坪・庫裡三〇坪、表門其他付属建物を加え七五坪あったといわれている。この寺は一八代まで住職の戒名、没年が明らかにされているが、山林五町歩のうち寺地より下は乱伐され、上の山は松・杉が残っているが廃寺同様となり、明治初年出石町の吉祥寺に引継がれ、山門は城崎の温泉寺に移されたといわれている。しかしその祭りは一時は出石郡の三大祭（初午・寺山・鬼子母神）の一つとされ賑わったとされている。いずれも寺院の土地取得が容易であった事を示しており、金藏寺山やこの寺山の禪定寺（庵）も、名僧の遍歴開山を伝えており、それを真実とすれば但東町はこれら名僧の目に止る寺院の立地条件が至るところにあり、その土地取得も容易であったことを示している。これらの遍歴開山の寺が減び、延宝年間に入つて勸請開山された藏雲寺や、再建金藏寺が今尚現存していることは、やはり寺院と村民との結びつきに最大の原因があるように思える。しかし明治二九年唐川の寺山寺院跡で出石から酌婦二〇名を迎え出石郡の日清役戦勝祝賀会が開かれたとの記事は面白い。

五、相田の安国寺

室町幕府の初代將軍足利尊氏（三三〇―三五五）が夢窓国師（二七六―三三〇）のすすめにより、後醍醐天皇の菩提を弔い、あわせて元弘の変以来の戦死者の霊を慰めるため、全国に一寺一塔を建立しようと願ひ出て建武二年（一三三二）勅許され、安国寺の造営が、全国に行われた。

しかし多くは戦後の経済的理由により、これまでの寺院を安国寺と呼びかえ、または修理して料所を寄進

第一節 中世の仏教とわが町

するに止まる例が多かった。安国寺の造営については、別に奈良時代の国分寺造営にしろ、足利氏による天下統一の威信を示そうとしたものである。但東町の安国寺跡は相田の寺谷の奥の台地にあるが、疎石そのほか当時を物語る遺構は何ものも残っていない。

現在の安国寺は中興住翁安公座元禪師（享保一四年・一七二九歿）により再興されたが、明治三六年（一八九三）相田部落一四戸の大火で炎上し、その後再建されたものである。

開基は足利尊氏、開山は臨濟宗、南北朝時代の名僧夢想国師である。本尊は木彫釈迦如来の座像であるが、近世の作と思われる。

安国寺の観音座像（台座 永正13年〔1516〕の作）



六、小坂の乗専寺

浄土真宗は鎌倉の初期親鸞上人が拓いた仏教で、一向宗とも呼ばれ農山村に広まった。有名な一向一揆はこの宗教の影響が大きかった。（笠原一雄著「一向一揆」）福井市の興宗寺は但馬行如を開基としており、その開基には但馬人が深いかわりをもっていたことが知られる。現存の但馬真宗教団は本願寺派、興正寺派、出雲寺派の三派が主となっており、豊岡の光妙寺は本願寺を、生野の金蔵寺、出石の福成寺は興正寺を、但東町の乗専寺（小坂）は出雲路寺を本寺と仰いでいる。

但東町小坂の乗専寺は小坂峠を経て丹波との交渉の深い土地に建てられた。開祖乗専は丹波の長田野の六人部の生れといわれ、覚如に傾倒して丹波の寺を本願寺に寄進した。覚如の筆頭の門弟で、大和の国で死んだと伝えられているが、故郷は長田野に近いところであり、大和に行く以前、小坂の五兵衛の許に乗専の姉が嫁いでいたので、姉の許で晩年を過すべく一寺を建立し乗専寺と名づけたといわれている。しかし乗専は大和にと旅立ち観応二年（三五）大和で死んだ。しかし今もその寺はこの但東町の小さい山村の集落に残っているのである。（石田松蔵著「但馬史」三卷・二二三～四頁）町内の古い寺の一つである。

顕如上人真筆

（長二尺二寸五分横五寸）



累縁起書原文（乗専寺所蔵）

御旗竹布名号略縁起書

抑此御旗竹布ノ名號ト申奉ルハ本願寺第十一世顯如上人撰洲石山ニ在ス御時彼地ハ日本無双ノ城地ナレバ織田信長此地ヲ所望ニ及ビケレバ上人初メ下門大進、粟津右近、上原織部、富嶋頼母、松井外記、中村將監、鈴木孫市、其外門徒ノ面々彼信長ハ神社佛客ヲ破却シ勉ノ再来ト立ツベキ大將直ハ此地渡スマシト己ニ合戦ニ及ヒケレハ信長度々敗軍シ依テ謀計ヲ以テ朝廷ヘ奏聞シ和陸ヲ調ヒ此上ハ其地ヲ信長江速ニ渡スベシトノ宣旨ニヨリ上人石山忍ビ出テ玉フ其夜貝塚ト半ニ宿シ玉フ御時信長閑者ツツカハシケレトモ上人佛殿ノ下ニ隠レ玉フ危キ御宴喻ヘ難シ其后天正十年六月二日紀洲鷺森ニ在ス御時ニ羽五郎左エ門ヲ大將トシテ大軍ニテ鷺森

ヲ七重ニ取カコミ鯨波ヲ上ケレバ用害ナキ坊舎ナレド鈴木孫市、志摩与四郎必死トナリテ防キケレトモ多勢ニ無勢ナレバ浄土真宗滅亡セシコト此時之ト顯如上人御真影ト供ニ庭上ノ薪ノ中ニカクレ玉ヒ大破レナバ薪ニ火ヲ付ヘシト覚悟シ玉フ処明智光秀都本能寺ニ於テ信長ヲ打取ケレバ五郎左エ門俄ニ軍勢ヲ引上ケ都ヲ差シテ登リシ故上人初メ奉リ御門徒ノ面々稀ニ死ヲノカレ玉フ危キ御復限リナシ十ヶ年ノ間上人御旗トシ玉フ御名號拜シ奉ハ上人御在世軍中御苦勞ノ呈ヲ思ヒ稔名號諸供拝礼スベキ者ナリ

第二節 中世農村の変貌と土地譲渡

中世の武士は農村の大きな名主から成長したものであるから、平常は多くの農民を駆使して大規模な農業を経営していた豪族が多かった。但東町内各所に残っている城跡は、これら豪族の居住跡でないかと思われる。しかし農業の発展はこのような経営を分解し、武士や大地主に隷従していた耕作農民に、独立自営の機会を与えるようになった。これら豪族武士や地主も、半奴隸的な百姓農民を使役して手作りするよりも、それらを解放し、自らの創意工夫で自由に耕作させ、それらから貢納として、米や所要労力を徴収した方が得であった。かくて中世以降、有力農民は次第に自作農化し、自己の土地を耕作し、従来の身分的な束縛から解放されるようになった。またそれら農民の中には、武士の被官として武士化するものもあり、逆に貧困に陥り、小作人の土地をまた借りして「又小作」化する者も出てきた。所謂「下作人」がこれである。いずれにせよ土地生産力の発展が、必然とこのような分解を起すことになったのであって、農地もこれらの生産力の発展と、階層分解の進展を背景として移動性をもつようになり、売買、譲渡が行われるようになった。したがって中世末期には、旧荘園内の武士の土地からの離脱、百姓請の盛んな抬頭、諸武士の勢力争による戦乱に対する協同防衛、生産力発展の先行条件となる用水、採草地の自主的共同利用、地方住民による使用専用区分の設定等の面から、住民による郷村制が各地で起り、この時代に今の町村の原形が出来上るのである。農村自治制とまではいかなかったが、町村の区域が明かにされ、境界が画定され、長・年寄・行事等と呼ばれる旧名主層を中心とした「村寄合」で入会・共同利用等村の生活の基礎が取決められるようになってきた。

実質的な町村制の自然的成立は、この時期まで遡って歴史的に明らかにされる必要がある。旧荘園的性格は寺社領で残ったし、山村や僻地ではなお残存した。しかし徳川幕府が大名領国制を布いた村方・町村の区域は、中世末期の郷村制の成立、その中心をなす氏神社の設立等によって、次第に自治的農村展開の母胎が成立するようになったといえる。

中世末期の村造りは、氏子神社の成立史でもあり、どの村にも次第に神社が祀られ、新しく生れた住民はその氏子となった。大名領国制はこのような町村を領地とする制度であり、戦国時代は、このような領地の攻防戦であった。このためどうしても専門的な兵農分離が必要であり、農民はこの町村の中で生産に従事し、上部構造の変化に対応してゆかざるを得なかった。

中世の土地の移動・永代譲渡が行われるようになった古文書は、各地の旧家に残っている。大永八年は細川高国が將軍義晴を奉じて入京した時代であり、中世末期の僧兵の乱や一向一揆等が起った時代であるが、土地永代譲渡の証文が但東町後の石坪武彦氏の古文書の中から発見されている。

次の写真は、大永八年（一五二六）年代が享保に変った年の、八月二八日の日付けによる「讓状」である。単なる所有権の移転でなく、永代に譲渡を約束していることが、中世の特質として注目される点であろう。

土地永代譲渡状

石坪若狭守重次より土地を石坪太郎左衛門へ永

代譲状。

大永八戊子季八月廿八日

石坪若狭守重次花押

石坪太郎左衛門

となつてゐる。(後部落石坪武彦所蔵文書)

